

色達喇榮寺五明仏学院事件に見る中国共産党の宗教政策

川田 進

知的財産学部 知的財産学科
(2006 年 9 月 29 日受理)

Religious Policies of the Chinese Communist Party in The Serthar Buddhist Institute Incident

by

Susumu KAWATA

Department of Intellectual Property

Faculty of Intellectual Property

(Manuscript received September 29, 2006)

Abstract

Serthar Buddhist Institute (色達喇榮寺五明仏学院) is located in Garze Tibetan Autonomous Prefecture in Sichuan Province. The Institute suffered harsh religious oppression by the Chinese government from 2000 to 2002. I conducted an investigation into the oppression at Serthar Buddhist Institute in 2001 and 2004. The purpose of this paper is to determine the religious policies of the Chinese Communist Party in the Tibetan region in Sichuan province by examining the Serthar Buddhist Institute incident. In addition, I would like to analyze the current situation in which Chinese intellectuals are becoming more interested in Tibetan Buddhism.

キーワード; 色達喇榮寺五明仏学院, 甘孜チベット族自治州, 色達県, ジグメ・プンツォク, ダライ・ラマ 14 世, 陳曉東, 『寧瑪の紅輝』, 中国共産党, 統一戦線工作部

Key word; Serthar Buddhist Institute, Garze Tibetan Autonomous Prefecture, Serthar County, Jigme Phuntsok, 14th Dalai Lama, Chen Xiaodong, *Ningma de honghui*, Chinese Communist Party, United Front Work Department of CCPCC

1. はじめに

四川省甘孜（カンゼ）チベット族自治州色達（セルタ）県に、色達喇榮（ラルン）寺五明仏学院というチベット仏教を教育研究する重要な拠点がある。カム（東チベット）を中心に強いカリスマ性をもつジグメ・プンツォク学院長のもとに、最盛期（1997年～1999年頃）には一万人を超す学僧が集まり、世界最大規模の仏学院となった。一方で活発な宗教活動は四川省政府を刺激する結果となり、2000年から2002年頃にかけて、仏学院は尼僧の放逐・僧坊の撤去・学院長への監視強化といった極めて深刻な事態に見舞われてしまった。この一連の弾圧行為を本稿では「仏学院事件」と呼ぶ。

1995年に作家の陳曉東が五明仏学院を取材し、長篇ルポルタージュ『ニンマの紅い輝き』（『寧瑪的紅輝』）を執筆した。この作品は1999年に甘肅民族出版社より出版されたが、政府の圧力により発禁処分を受けてしまった。『ニンマの紅い輝き』には、都会で暮らす漢人（主に知識人）がどのようにしてチベット仏教と出会い、仏学院でどのような修行生活を送っているかが詳細に記されている。漢人作家の視点から描かれた漢人信徒とチベット仏教の親密な関係は、宗教活動への規制を強化している中国政府には見過ごすことができなかった。仏学院事件発生の原因を探る際、この作品は重要な鍵となることは間違いない。本稿では、発禁処分後、各種ウェブサイト上に掲載された作品を資料として用いる。

筆者は2001年12月と2004年8月に、五明仏学院にて弾圧事件に関する調査を行った。本稿は、現地調査と文献調査の両面から仏学院事件の検証を行うことで、東チベットにおける中国共産党の宗教政策の一端を明らかにすることを目的とする。

五明仏学院は四川省政府が正式に認可した宗教教育機関であるが、事件発生前から現在に至るまで当局の監視下に置かれ、宗教活動の一部は制約を受けている。現在中国では、五明仏学院は監視と整頓の対象であり、宗教学や宗教政策研究の対象とは見なされていないため、関係する学術論文は発表されていない。日本では五明仏学院の存在は、チベット学や現代中国学を専攻する一部の研究者には知られている。例えば、平野聡が「宗教から見た中国国家——『世俗権力の合理性』とその限界を中心に」の中で、仏学院事件を「中国国

家と内心の自由の関係を問う問題」として分析している¹⁾。ただし、仏学院が辺境の地にあり文献資料が少ないという制約があるため、まとまった研究成果はまだ確認されていない。

2. 五明仏学院の創設

2.1 仏学院関係資料

仏学院事件の背景を探るには学院の沿革と組織を把握する必要があるが、公開された資料は多くない。以下に3点の資料を掲げる。

- (1)「色達喇榮五明仏学院」『藏族大辞典』、甘肅人民出版社、2003年、678頁

仏学院に関する基本的な情報を記した学術資料（漢語）は存在しない。筆者が確認できたものは、仏学院の概略を記したこの1点のみである。字数が約340字と少なく、資料的価値は高くない。ただし、「喇榮」（ラルン）という地名の由来及び、仏学院と漢人僧尼・アジア各国の信徒との関係に言及している点は重要である。

- (2)「色達県喇榮寺五明仏学院簡介」²⁾

「寧瑪資訊」のウェブサイトに掲載された資料である。インターネット上には、漢人信徒が開設した各種サイトに多様な情報が載せられているが、(2)は現在最も詳細かつ有用なものである。以下の13章より構成されている。

- ①簡介、②宗旨、③管理機構、④学制、
- ⑤教師隊伍、⑥學員構成、⑦課程設置、
- ⑧教学方式、⑨學校設備、⑩文物、
- ⑪仏事活動、⑫經濟管理、⑬畢業去向

文章の末尾に「色達県喇榮寺五明仏学院 1998年7月」と記されており、学院長側近の漢人僧尼か信徒が1998年に執筆したと考えられる。

- (3)陳曉東『寧瑪的紅輝』

- ①「普渡衆生」ウェブサイト版³⁾
- ②「陳曉東」ウェブサイト版⁴⁾



図-1 陳曉東が1995年に撮影した五明仏学院
Fig.1 Serthar Buddhist Institute (1995)

先に触れた陳曉東の長篇ルポルタージュである。①には1章から30章まで、②には1章から32章までが掲載されている。①は写真なし、②は作者が撮影した仏学院及び色達の町の写真を収めている。図1は陳曉東が1995年に撮影した写真であり、筆者が確認した最も古い仏学院の姿である。本稿では必要に応じて2種類の版本を用いた。この作品は作者が訪問した1995年当時の仏学院の教学情報、漢人信徒の修行生活を記した貴重な文献である。

2.2 講習所から仏学院へ

色達喇榮寺五明仏学院の歴史は新しい。ジグメ・プンツォクが1980年に、三十名余りの僧侶を相手にチベット仏教ニンマ派の教義を伝授する講習所を開いたのが始まりである⁵⁾。場所は色達(セルタ)県洛若郷の喇榮(ラルン)と呼ばれる谷間であった。「ラルン」は「高僧と認められる」を意味するチベット語「ラマルンワ」が縮まった言葉であり、現在は仏学院とその周辺を指す地名となっている⁶⁾。ただし講習所といっても、開設当初はバラックや簡易テントが点在するだけの修行地であった。喇榮(ラルン)講習所の噂は瞬く間に広まり、ジグメ・プンツォクのもとに東チベット一帯から僧侶が集まり始めた。1980年代前半、文化大革命の影響により多くの寺院は閉鎖され、僧侶が行き場を失っていたからだ。喇榮にきた僧侶は自らの手で僧坊と経堂を建て、修行と学問の空間を築き上げていった。

1980年代前半に、喇榮講習所がどのようにして

規模を拡大していったかを知るための手掛かりとなる資料はない。最盛期の学僧数から見て一年に数百人単位で増加していったと考えられるが、学僧の急増が問題視されたという記録はない。各地の寺院の復興が進まないなか、講習所は色達県及び周辺地域の宗教活動の拠点として大きな役割を果たした。

1980年代、喇榮講習所に二度大きな転機が訪れた。一つは1982年3月に、党中央が「關於我国社会主义时期宗教問題的基本觀點和基本政策」という通達を出したことである。これは文化大革命終結後に中国共産党が定めた宗教政策の指針とも言える重要な文献であり、「中央1982年19号文件」(以下「19号文件」と略す)とも呼ばれている⁷⁾。政策の柱である宗教信仰の保護、職業的宗教者の養成、活動拠点の整備等を積極的に推し進めることで、民族の団結と社会の安定を実現することが狙いである。

この「19号文件」を受けて、甘孜(カンゼ)州党常任委員会はすでに開放されているチベット仏教16寺院に加えて、新たに26寺院を開放する決定を下し(1982年11月27日)、「關於開放部分寺廟的通知」を出した(1982年12月8日)。更に仏塔や経堂などの新たな設置も認め、地域に根ざした信仰の場を確保する方針も決まった⁸⁾。「19号文件」の通知が追い風となり、ジグメ・プンツォクは色達県の党と政府の指導を仰ぎながら、仏教理論の探求と民族文化の継承を掲げて喇榮講習所の基盤整備に尽力した。「19号文件」から3年後の1985年5月19日、色達県政府は喇榮講習所の創設を正式に認可した⁹⁾。

もう一つの転機は1986年夏に、パンチェン・ラマ10世(1938年～1989年)が甘孜チベット族自治州12県を視察に訪れたことである(8月4日～10月9日)¹⁰⁾。当時パンチェン・ラマは全国人民代表大会常務委員会副委員長という職にあり、北京に在住し中央とチベット地区の橋渡し役を任されていた。一方で、チベット仏教ゲルク派の活仏として、ダライ・ラマ14世のインド亡命後、中国国内におけるチベット仏教徒の精神的支柱でもあり続けた。

パンチェン・ラマは色達(セルタ)県を視察した際、ジグメ・プンツォクと面会し、喇榮講習所がチベット仏教の再興と継承に大きな役割を果たすことを確信した。視察の翌年にあたる1987年、

パンチェン・ラマ自身が「色達喇榮寺五明仏学院」と命名し、設立の認可を表明した。そして色達県政府に書簡を送り、全面的な支援を要請した。パンチェン・ラマの積極的な行動は、五明仏学院にとって更なる追い風となった。1988年、ジグメ・プンツォクはパンチェン・ラマの招請により北京を訪問し（図2）、蔵語系高級仏学院で講義を行い、多くの僧侶や宗教関係者と交流を深めた¹¹⁾。



図-2 1988年北京にて パンチェン・ラマ10世（中）
ジグメ・プンツォク（右）

Fig.2 Panchen Lama and Jigme Phuntsok (1988)

その後、1992年にアポ・ガワジグメ（阿沛・阿旺晋美、1910年生、当時全国人民代表大会常務委員会副委員長）が、パンチェン・ラマの認可から5年を経た仏学院の教育活動を称讃した。続いて1993年に、趙僕初（1907年～2000年、当時中国仏教協会会長）が学院名を扁額に揮毫し、チベット仏教の新たな教育機関が順調に発展していることを祝福した。そして1997年、甘孜（カンゼ）州宗教局の申請を四川省宗教局が認可したことにより、色達喇榮寺五明仏学院が正式に誕生した¹²⁾。

2.3 学院の組織と学制

五明仏学院の組織や学制に関する情報を最も詳細に記した資料は、「色達県喇榮寺五明仏学院簡介」である。以下、この資料に基づき、学院の組織と学制の概要を紹介する。ただし、1998年7月当時の情報である。

(1) 学院組織

喇榮寺に五明仏学院が付設された形になっているが、実際は寺院より仏学院が組織上重要な位置を占めている。

【学 院 長】ジグメ・プンツォク

【副学院長】テンジン・ギャムツォ他3名

【辦 公 室】主任1名、副主任3名、秘書3名、
政治宣伝員2名

【教 務 科】科長1名、副科長2名

共同文化系（語言部・歴史部・小五明部）

顕教系（中觀部・俱舍部・因明部・戒律部・智慧度部）

密宗系（加行部・続部部・竅訣部）

各科に主任1名、各部に部長1名

【後 勤 科】科長1名、副科長2名

財会組：組長1名、会計1名、出納1名、
管理員3名

医務組：組長1名、医師20名

接待組：組長1名、保管員3名

【保 衛 科】科長1名、副科長2名

（ただし、ジグメ・プンツォク学院長は2004年に圓寂した。）

(2) 学制

正規生の修業期間は6年、特殊な学位取得には13年を要する。入学時の学力が一定の水準に達しない場合は、先に予備班に編入しなければならない。定められた課程を終了し、試験に合格した者には卒業証書が与えられる。更に論文と口頭試問に合格した者にはケンポ（仏教学博士に相当）の学位が与えられる。必要に応じて1～2ヶ月、もしくは1～2年の短期研修も実施する。研修終了者には修了証書が与えられる。

ただし実際には、学院への入学に際して特別な条件はなく、指導を受ける教師の許可が得られれば問題はない。修業年数も規則に縛られることは少なく、学僧個人の状況に合わせて自由に設定することができる。

五明仏学院の学僧は約90%がチベット人僧尼であるが、一般の寺院と異なる点は学僧の定員が設けられておらず、比較的自由に入学許可が得られることである。パンチェン・ラマの強い働きかけが実を結び学院が誕生した経緯もあり、1990年代は寺院を管理する宗教局や統一戦線工作部の監視も緩やかであった。やがて、ジグメ・プンツォク院長の優れた指導が評判となり、学院で学問と修行に励む僧尼や信徒の数は急速に増加した。漢人僧尼や漢人信徒の他に、台湾やシンガポール等東アジアの仏教圏からも僧尼や信徒が集まり、喇榮の谷は一万を超す学僧たちの熱気にあふれた（図3）。しかし、管理当局は肥大化した仏学院

の状況をいつまでも放置してはいなかった。2000年以降、数度にわたり学僧に強制退去命令が出された。



図-3 五明仏学院（2001年8月撮影）

Fig.3 Serthar Buddhist Institute (2001)

3. 仏学院事件

3.1 二つの報告

第16回党大会開催を間近にひかえた2002年10月、四川省統一戦線工作部（略称四川統戦部）は会議で、民族政策・宗教政策の指針と成果を確認した。会議録の中に、次のような一文を見つけた。

チベット族居住地区では愛国主義教育を実施し、五明仏学院に対する管理強化・粛清は大きな成果が見られた¹³⁾。

五明仏学院は2000年頃より、四川省統戦部の強硬な指導を受け大惨事に見まわれた。2000年から2002年にかけて、数回退去命令が下された結果、数千名もの僧尼や信徒が学院を追われ、推定二千戸の僧坊が解体撤去されてしまった。これが統戦部の行った「管理強化・粛清の成果」であったが、実際に指導を行った戸数と学僧数は公表されていない。

一方、アメリカ政府が作成した「2001年人権報告・中国」にはこういう記述がある。

6月、中国当局は数千名の僧尼に対して、四川省甘孜チベット族自治州にあるセルタ仏学院から退去するよう命じた。政府は健康と衛生面を理由に、中国で最多数の学僧を抱える仏学院の規模縮小を強行した。外国の観測筋による

と、当局が学院にとった措置の原因は、学院の規模とカリスマ性をもった創始者ケンポ・ジグメ・プンツォクの影響力によるものであるという。年末になってもケンポ・ジグメ・プンツォクはまだ学院に戻っていない¹⁴⁾。

二つの報告が公表されたのは共に2002年であった。中国政府は国家の安定と民族の団結を守るために愛国主義教育を行い、過熱した宗教活動に適切な「指導」を実施したことを力説している。一方、アメリカ政府は宗教保護と人権擁護の立場から、中国の行き過ぎた宗教政策が信教の自由と僧尼の人権を脅かす弾圧行為であると非難している。二つのレポートには、両国政府の宗教と人権をめぐる立脚点の相違が鮮明にあらわれている。

3.2 事件の報道

日本のマスコミが仏学院事件を報道した形跡はなく、筆者が確認した記事は『宗教弾圧』をビデオで告発 中国『信仰の自由』の真相』（『AERA』2002年2月4日号、朝日新聞社）のみであった。これはチベット人僧侶が僧坊破壊の様子を撮影したビデオをある日本人に託した記事である。Voice of Americaのウェブサイトは、2002年4月にチベット独立を主張する活動家がインドでこのビデオを放映したことを報じている¹⁵⁾。

元朝日新聞社記者堀江義人は、退職後著書『天梯のくに チベットは今』（平凡社、2006年）の中で、仏学院事件と漢人修行僧の関係、そしてジグメ・プンツォク学院長圓寂について紹介している（第4章「全民信教」130－131頁）。しかし残念ながら、記述内容は断片的である。堀江氏が記者時代に仏学院の取材を行うことは許されなかったはずだ。

日本で事件の報道がなされなかった理由はいくつか考えられる。仏学院がチベット自治区ではなく四川省の奥地にあり、ニュース価値が低いと判断されたため。報道機関による事実関係の把握が不十分であったため。政治と宗教という中国政府にとって敏感な問題を報じることで、他の重要な取材に支障が出ることを懸念したためなどである。

『NATIONAL GEOGRAPHIC日本版』（2002年4月号、日経ナショナルジオグラフィック社）が「チベット 新時代の息吹と宗教」と題する記事の中で尼僧追放について断片的に触れているが、記事の中心はチベットに押し寄せる経済と信仰の変

化を紹介したものであった。

インターネット上では、欧米のチベット支援団体が活発に記事や写真を掲載した。これらを利用して、ダライ・ラマ法王日本代表部事務所は、外国のメディアが報じた記事やチベット支援団体が出したレポートの日本語訳を2001年から2002年にかけてウェブサイト上に掲載した。速報性を重視したこれらの記事は、固有名詞等の記述に正確さが欠ける面はあるが、事件に関する情報が極めて少ない日本では貴重なものであった。以下はダライ・ラマ法王日本代表部事務所のサイトに掲載された記事の一覧である¹⁶⁾。

- (1) 2001年6月21日「中国、仏教徒センターを弾圧」(ワシントン・ポスト)
- (2) 2001年8月21日「武装警官隊がチベット仏教尼僧院を略奪」(ITNニュース)
- (3) 2001年8月23日「中国のチベット僧・尼僧迫害に、アメリカ懸念」(ワシントンAFP)
- (4) 2001年8月23日「二人のラマ僧の話」(アジア・ウィーク)
- (5) 2001年9月27日「チベット仏教僧院長強制退去続報 文化大革命以来最大規模の文化破壊が目的」(カトマンドゥ)
- (6) 2001年9月28日「チベット仏教指導者が軍病院に拘留」(ニューヨークタイムズ北京)
- (7) 2001年11月8日「ケンポ・ジグメ・プンツォク師、成都に」(チベット・インフォメーション・ネットワーク最新ニュース)
- (8) 2001年11月14日「チベット東部で拡大する僧院の破壊」(カトマンドゥ、国際ナショナル・キャンペーン・フォー・チベット)
- (9) 2002年4月18日「新世紀の『宗教活動』 四川省における党政策の実施」(チベット・インフォメーション・ネットワーク特別レポート)

3.3 破壊の傷跡 (2001年12月)

2001年12月、筆者は事件の現状を把握するために五明仏学院を訪問した。そこで見た光景は目も当てられないほど悲惨なものであった。学院入口付近の北西斜面では、おびただしい数の僧坊がごとく破壊されていた(図4)。柱や壁に用いられた木材はすべて撤去され、土台と土壁、そしてゴミが残されていただけであった。面積から判断して、撤去戸数は約一千戸と思われた。解体された一画には強固な土塀が築かれ、部外者の進入を

妨げていた。



図-4 五明仏学院北西部 (2001年12月撮影)

Fig.4 Serthar Buddhist Institute (2001)

同じく入り口付近の南西斜面にも、僧坊解体の跡が広範囲に確認できた(図5)。ただし南側の一面は、解体後の木材や生活用品、ゴミや土台に至るまでほぼすべてが取り除かれ整地されていた。破壊の痕跡を消し去るのが目的であることは、一目瞭然であった。この一帯だけは荒れた黒い地面がむき出しになっており、草はまったく生えていなかった。おそらく一、二年もたてば、そこには青々とした草が生い茂り、無惨な爪あとを覆い隠してしまうことであろう。

チベット・インフォメーション・ネットワーク(TIBET INFORMATION NETWORK)のウェブサイトには、武装警察の指示で僧坊を解体する作業員の写真(図6, 2001年6月～7月)と当時の状況を報告したレポート(2001年8月19日発表)が掲載された¹⁷⁾。また、2002年4月のレポートには、被害にあった尼僧の証言を詳しく紹介している¹⁸⁾。解体撤去に雇われた漢人作業員には、一戸あたり250元の報酬が支払われ、木材の私物化が許されたという情報もあるが、詳細は不明である¹⁹⁾。



図-5 五明仏学院南西部 (2001年12月撮影)

Fig.5 Serthar Buddhist Institute (2001)



図-6 僧坊を解体する作業員(2001年6月～7月)

Fig.6 Destruction of Serthar Buddhist Institute (2001)

僧坊群は仏学院の本堂や管理棟を取り囲み、谷の四方の斜面を隙間なく埋め尽くしている。その数は六千とも八千とも言われているが、筆者が現場を確認したところ、解体された僧坊は全体の6分の1程度である。

解体跡を除けば、学院内では日常の生活が営まれていた。八百屋・肉屋・果物屋・雑貨屋・食堂、その他に活仏の写真やポスターを売る露店などが営業しており、物々しい警戒が行われている様子は感じられなかった。仏学院滞在中の12月25日に大きな市が開かれた。僧侶の話では、毎月チベット暦の10日に市が立つそうだ。近隣の村人たちは、早朝から商品を背負って学院に通じる坂道を上っていた。本堂をはさんで東側が男僧、西側が尼僧のための会場であった。尼僧の売場は芋を洗うような混雑ぶりで、じゅうたん・ふとん・コンロ・鍋・靴・ラジカセ・カセットテープ・書籍など、ふだん学院内で手に入れにくい商品に人気が集まっていた。ただし中古品も多数含まれていた。

一見、平穏な生活が送られているかに見えたが、学僧たちは次なる魔の手の襲来を予感して心を痛めていた。本来、数百名いるはずの漢人僧尼や信徒の姿はまばらであった。身の危険を感じて自ら避難した者もいれば、強制的に退去させられた者もいると聞く。仏学院の入口には、「観光客立入禁止」「学院内撮影禁止」と漢語で書かれた立て札があった。学院内で店を出す主人は、「私服の公安関係者が常に目を光らせているので撮影の際は

注意するように」と語った。

被害にあった僧坊の大部分は尼僧のものであった。各種ウェブサイト上の情報を整理すると、僧坊の大規模な解体と撤去は2000年12月、2001年6月～7月、2002年12月に実施された²⁰⁾。筆者が現地で確認した南西部は2000年12月、北西部は2001年6月～7月に撤去されている。四川省の管理当局は僧坊を解体後、学僧に仏学院から即刻退去し帰郷するように命じた。対象となったのはほとんどがチベット人尼僧であるが、漢人僧尼や在家信徒、シンガポールや台湾から来た者も含まれていた。郷里に戻り農作業に従事した者もいれば、ラサ近辺に身を隠した者もいる²¹⁾。2002年12月の解体時には、当局と尼僧の間に衝突が生じ双方に負傷者が出た他、僧尼に逮捕者も出た²²⁾。

僧坊は住居でもあり、瞑想修行の場でもある。生活と修行の基盤を奪われた尼僧の多くが、近くの山中をさまよい身を隠したという。そして、理不尽な迫害にたえかねて体調をくずす者が続出した。自ら命を絶つことで抗議の意をあらわした者もいた²³⁾。

3.4 破壊の爪痕(2004年8月)

2004年8月に筆者は再度五明仏学院を訪問した。2001年12月に調査した区画はその後どのように変化したであろうか。南西斜面一帯は青草が生い茂っていたが、基礎跡から以前そこに僧坊群があったことが判別できた(図7)。そして、隣接した東側も小規模ながら新たに撤去されており、柱として使われていた立派な木材が一部放置されていた。北西斜面は土壁がすべて取り除かれていたが、斜面が急なため階段状の基礎土台跡はそのまま放置されていた(図8)。うっすらと草が生えていたものの、破壊の爪痕は生々しく残されていた。

他の居住区も無傷ではなく、全体の規模から見れば目立ちはしないが、撤去跡が点々と確認できた。僧尼の数は明らかに大きく減少しており、夜間は灯りがともらず、早朝も炊事の煙が立ち上らない僧坊が増えていた。現地で複数の僧尼に聞き取りを行ったところ、狙い打ちされたのは主に漢人・外国人そしてチベット人の尼僧であり、漢僧は男女を問わず放逐の対象となったことがわかった。2000年頃に始まった五明仏学院への暴力行為は2003年頃沈静化した。統戦部の監視は2004年8月当時も続いていた。



図-7 五明仏学院南西部（2004年8月撮影）

Fig.7 Serthar Buddhist Institute (2004)



図-8 五明仏学院北西部（2004年8月撮影）

Fig.8 Serthar Buddhist Institute (2004)

4. 放逐された尼僧

4.1 「憲法」と「19号文件」

先の「19号文件」が五明仏学院創設を側面から援護したことは間違いないが、この文書は中国における宗教活動の完全なる自由を保障するものではない。

「19号文件」の基本姿勢は「宗教信仰の自由を尊重し保護することは、党の宗教問題に対する基本政策である」（第4章）という一文に表れている。このことは「中華人民共和国公民は、宗教信仰の自由を有する」「国家は正常な宗教活動を保護する」という憲法第36条の理念と一致している。

しかし、その一方で「19号文件」の冒頭には、「宗教は人類社会が発展していく上で、ある段階での歴史的現象であり、発生・発展・消滅の過程をもつ」（第1章）と規定され、「人類の歴史において、宗教は結局消えてなくなるべきものである」（第1章）とも述べられている。

一見矛盾した論理に思われるが、これは国家が正常と見なした範囲の宗教活動のみを保護すると解釈できる。事実、政府は各級行政機関に宗教を管理する事務部署を設置し、宗教団体への統制を行っている。そして、憲法第36条の最後には、「宗教団体と宗教事務は、外国勢力の支配を受けない」という一文もあり、チベット仏教に限らずキリスト教やイスラム教の諸団体も、国外の宗教組織との連携は大きく制限されている。国家から見た正常な宗教活動とは、国務院宗教事務局の指導と監督を受けるという厳しい制約のなかでの活動である。

そのことは「19号文件」第3章にも述べられている。

新たな歴史時期において、党と政府の宗教に対する政策の基本任務は、宗教信仰の自由政策をしっかりと徹底して実行することであり、各民族宗教界の愛国的な政治の連携を強化拡大することであり、彼らに対する愛国主義と社会主義の教育を強化し彼らの積極的な要素を動員することであり、近代化した社会主義強国を建設するために、祖国の統一という大事業を成し遂げるために、そして覇権主義に反対し世界平和を守るために共に奮闘することである²⁴⁾。

従って、「19号文件」が定める宗教活動の自由は、党の統一戦線活動の枠組内での自由とも言える。

4.2 県政府・公安局の通達

例えば、特定の宗教団体が外国の宗教組織と親密な関係をもち、その活動が祖国統一を脅かすと判断された場合、政府は乱暴な手段を用いてでも制裁を加えることがある。五明仏学院の場合、1990年代に学僧数が急増し一万人規模にまで達した。しかもジグメ・プンツォク院長は1990年にインドを訪問した際、ダライ・ラマ14世と積極的な交流を行った（両者の関係は後述する）。政府から見た1990年代の五明仏学院は正常な宗教活動の枠組から逸脱しており、厳しい指導を加えることで軌道修正を促す必要があった。ただし、ダライ・ラマのノーベル平和賞受賞（1989年）後、チベット問題が世界的な注目を集める中、仏学院の規模拡大やダライ・ラマとの接触を理由にした制裁を

行うことはできなかった。

それでは当局はいかなる方法で、仏学院に制裁を加えたのであろうか。筆者はその手がかりが、色達県政府の通達にあると考える。

図9は2001年9月3日に色達県人民政府が発した文書「色達県人民政府關於批轉色達縣宗教事務局《關於加強喇榮寺及其五明仏学院管理辦法》的通知」(以下「通知」と略す)である。これは色達県宗教局の「喇榮寺及び五明仏学院への管理方法強化について」という文書に、色達県政府が指示を加えて関係部署へ転送したものである。転送先は「县委・県人大常委会・県政協・県紀律・県法院・県検察院・県人武部」と記されている。筆者は2004年8月に喇榮寺の掲示板でこの文書を確認したが、2枚目以降は撤去されていた。

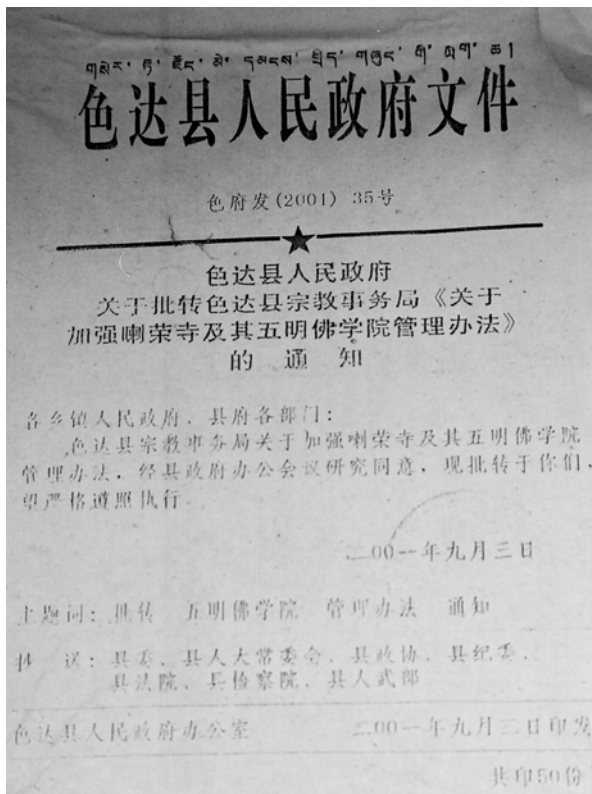


図-9 色達県政府による管理強化通知
(2004年8月撮影)

Fig.9 Serthar Government document

この「通知」を受けて、色達県公安局は2001年10月24日「色達県公安局關於在喇榮寺和五明仏学院及周辺地区加強管理的規定」(以下「規定」と略す)という通達を出した。これは喇榮寺・五明仏学院及び周辺地区に対する管理強化を示した規定

であり、筆者は2001年12月に喇榮寺の掲示板でこの文書を確認した。

仏学院で最も大規模な破壊活動が行われたのは2001年6月から7月にかけてである。「通知」はその2ヶ月後に、「規定」はその3ヶ月後に発表されている。これらの文書には、四川省政府がこれまでに行った仏学院への弾圧行為が、地域の安定と秩序を維持するための適切な指導であったことを示す意図がある。「規定」7項目の内容を簡潔に整理し、以下に示す。

(1) 常住人口管理

- ・「中華人民共和國戸口登記条例」に基づき、喇榮寺・五明仏学院・阿交村・喇榮村を対象に家屋及び住民登録調査を実施する。
- ・各戸に地番札を与えるが、勝手に偽造や売買を行ってはならない。
- ・僧尼・信徒・村民は洛若郷派出所にて住民登録を行うこと。
- ・戸籍簿を派出所に提示した洛若郷の住民には、新たな戸籍簿(居民戸口簿)を発行する。
- ・色達県の他の地区に戸籍をもつ洛若郷の住民は、当面定住者として管理する。
- ・喇榮寺の定員を400名とする。

(2) 流動人口管理

- ・喇榮寺への巡礼者、五明仏学院の受講生、旅行者、商業従事者は身分証を提示し、派出所で手続きを行うこと。
- ・1ヶ月から6ヶ月間の居住者には、派出所で手続きの上、短期居住証(暫住証)を発行する。
- ・6ヶ月以上滞在する者は、色達県宗教局の許可を得た上で、派出所で短期居住証の発行を受けること。
- ・仏学院に在籍する学僧には、寺院管理委員会が作成した名簿に基づき、各年度ごとに審査した上で短期居住証を発行する。

(3) 境外人員管理

- ・境外人員(外国人、香港・マカオ・台湾住民、外国に居住するチベット人)は、ビザがあれば色達県を旅行できる。
- ・喇榮寺や五明仏学院を訪問する者は、色達県宗教局の許可と洛若郷派出所の検査が必要である。
- ・寺院や仏学院に宿泊する際には、事前に届け出が必要である。宿泊所の責任者は24時間以

内に派出所に連絡しなければならない。

(4) 治安管理

- ・洛若郷派出所・寺院管理委員会・阿交村委員会が協力して、地域の治安維持に努める。

(5) 特殊行業管理

- ・旅館業を営む場合は、派出所に申請し許可を得なければならない。
- ・コピー機・パソコン・プリンターを設置する場合は、派出所に申請しなければならない。

(6) 消防管理

- ・五明仏学院は多数の僧坊が密集し、電線が無秩序に張り巡らされ、消防管理上危険な状態にある。寺院管理委員会・阿交村委員会は火災発生を未然に防ぐための措置を講じなければならない。

(7) 交通管理

- ・地区外の車両が進入する際は、寺院管理委員会と阿交村委員会の許可を得なければならない。

「規定」によれば、色達県の戸籍をもつ者は、短期であれ長期であれ仏学院に在籍することは可能である。学僧たちへの聞き取り調査（2001年12月）によれば、県外に戸籍を持つチベット人僧尼への公安局の対応はまちまちであった。学院への滞在が許された者もいれば、退去処分を下された者もいた。とりわけ経済力の弱い尼僧に厳しい処置がとられたようだ。「規定」にある「流動人口」とは、主に県外出身の学院在籍者を指している。短期居住証発行の権限を握っているのは県の公安局であり、「規定」を過度に厳しく運用して発行数を抑えることも可能である。つまり政府は、急増した「流動人口」の適正な管理を名目にして学僧数を大幅に削減することで、仏学院の弱体化を図ったのである。その上、居住者不在となった僧坊は、火災や盗難の発生と治安の悪化を防止する理由で、行政が公費で解体撤去した。

被害にあった尼僧は「突然の退去命令は仏学院で学ぶ権利の剥奪である」「僧坊の解体撤去は本人の同意を得ていない蛮行である」と反論したが、公権力に立ち向かう術はなかった。尼僧の大半は四川省内のカンゼ州・アバ州各県から来ている。青海省や甘肅省、チベット自治区、内蒙古自治区出身者も少なからずいる。おそらく尼僧のうち約半数が県外出身者であろう。ただし学院の入口近くの僧坊全体が解体されている状況を見ると、尼

僧一人一人の身元調査をきちんと行った上での措置ではなく、狙った区画の僧坊を有無を言わず撤去し、居住を許可した者を他の僧坊へ移したと考えられる。

尼僧の大半が農村の出身であり、初等教育をきちんと受けていない。したがって漢語の読み書きが不自由であり、張り出された通達を読むことができない。十分な情報や説明が得られないまま、若い尼僧は学院を追われていった。満足の現金を持ち合わせていないため、知り合いを頼ったり物乞いをしながら他県へ流浪していった者は数知れない。

北京政府はチベット自治区内の宗教活動に対しては年々制限を強めていったが、四川省政府は省内のチベット地区には比較的緩やかな規制しか敷いてこなかった。四川省政府はなぜ学院にこのような強い圧力をかけたのであろうか。

5. ジグメ・プンツォク略伝

筆者は政府が五明仏学院を問題視した理由は三つあると考える。それはカリスマ性をもつ院長の存在、学院の急速な規模拡大、漢人（主に知識人）のチベット仏教への関心の高まりである。

2001年12月、筆者はジグメ・プンツォク院長に面会を求めて仏学院を訪問したが、院長は不在であった。僧侶に尋ねると、皆一様に「成都で療養中だ、いつ戻れるかわからない」と答えた。その年の夏、ネット上では「ジグメ・プンツォク院長、当局の指示で成都にて療養」「当局の狙いは院長の指導力低下と学院の規模縮小」というニュースが流れていた。2001年のレポートによると、夏に四川省アバ州馬爾康（マルカム）にある軍の病院に入った後、秋に成都へ転院したことがわかる。療養に向かう以前から当局は、ジグメ・プンツォクに学院での教学活動を禁じる措置をとっていたということだ²⁵⁾。体調をくずしていたことは事実であるが、一年以上も学院へ戻ることが許されず、公安当局の監視下に置かれていたのは尋常なことではない。ジグメ・プンツォクへの隔離と監視は、彼の宗教的影響力の強さを物語っている。

当局が恐れをなすジグメ・プンツォクとはいかなる僧侶なのであろうか。ネット上には以下の3種類の略伝が掲げられているが、1980年に喇榮講習所を開設する以前の履歴には不明な点が多い。

(1)「聖者法王如意宝晋美彭措勇列吉祥賢略伝」²⁶⁾

(2)「法王晋美彭措伝」²⁷⁾

(3)「如意宝晋美彭措法王簡伝」²⁸⁾

(2)の作者はケンポ・ソダジ（索達吉）、ジグメ・プンツォクの側近僧侶である。3篇の略伝の中で、最も内容が詳細でありかつ信頼度が高いと言える。(1)と(3)は作者不明である。

ジグメ・プンツォクは1933年、現在の青海省班瑪（ペマ）県に生を受け、2歳の時にニンマ派高僧レーラブ・リンパ（列洛林巴）の転生者と認定された。わずか6歳でチベット語の読み書きを習得し、一種の予知能力を備えていたと伝えられている。16歳の時に中華人民共和国成立を迎えた後、石渠（セルシュ）の江瑪寺などで高僧の指導を受け、青年期を学問と修行に明け暮れた。1960年代・70年代は民主改革や文化大革命という政治の嵐に直面し苦難の日々を送ったが、その頃の詳しい足取りは明らかになっていない²⁹⁾。

1959年にダライ・ラマ14世がインドに亡命した後、東チベットの僧侶たちも相次いでインドへ逃れた。文革終結後、国内のチベット仏教徒を精神的に支えていたバンチェン・ラマ10世も1989年に圓寂した。1990年代に入り、各寺院の再建が進み徐々に宗教活動が活発になるなかで、東チベットニンマ派の僧侶や信徒の心を束ねていた高僧の一人がジグメ・プンツォクであった。五明仏学院の発展とともに彼の名声は年々高まり、その影響力は東チベットのみならず、一部の漢人僧尼や信徒にまで拡がり始めた。

商店内や車のフロントガラスには高僧の写真が飾られているが、カムでよく見かけるのはジグメ・プンツォクである。1993年に仏学院で極樂法会が催された時には、15日間に計43万人もの僧侶や在家信徒が集まり、霊驗あらたかな院長の説法に耳を傾けたという³⁰⁾。信徒向けに法会の映像を収めたビデオCDも市場にでまわっている（漢語字幕あり）。カルマパ17世も2000年にインドへ逃れた後、ジグメ・プンツォクは、中国のチベット仏教圏で強いカリスマ性を持った数少ない高僧となった。

6. ダライ・ラマとの関係

6.1 海外歴訪

1990年代に入り仏学院の運営が軌道に乗ると、ジグメ・プンツォクの行動範囲は漢人信徒の居住する内陸や沿海部の都市（漢地）のみならず、外国にまで拡がっていった。1990年にインド、1993

年に日本・アメリカ・カナダ・イギリス・フランス・ドイツ・オランダ・台湾・香港、1995年にシンガポール・マレーシア等東南アジア各地を歴訪した³¹⁾。

1995年4月、東南アジア訪問の際、四川省政府に3ヶ月間有効のパスポートを申請したところ、発行されたのは5年間有効のものであった。最終判断を下したのは北京の国務院宗教局であり、6月に帰国し成都へ戻った時、ジグメ・プンツォクを出迎えたのは四川省長（当時）の肖秧（1929年～1998年）であった³²⁾。そしてその年の冬、2ヶ月余りにわたる台湾行きも問題なく許可されたという。こうしたエピソードが示すように、1990年代前半、五明仏学院と四川省政府の関係は良好であった。仏学院がチベット地区社会の安定を支える重要な存在であることを省政府は理解していたからだ。しかし、好事魔多し。インド訪問から10年後、ジグメ・プンツォクと仏学院は激しい政治の逆風に苦しめられることとなった。

6.2 ダラムサラ訪問

1990年、ジグメ・プンツォクはペマヌプ法王（インド南方高級仏学院院長、1932年生）の招請を受けてインドを訪問した。その際、ダライ・ラマ14世に招かれ、ダラムサラのチベット亡命政府を訪れた。ケンポ・ソダジ著「法王晋美彭措伝」の「和達頼喇嘛的宿縁」と「在達拉姆薩拉的日子里」の章に基づき、インド訪問の行程と滞在記録を以下に示す。

【4月～5月】チベット仏教各寺院を訪問し精力的に歓迎行事に参加した（詳細な行程は不明）。

【5月20日頃】ダライ・ラマ自らニューデリーに赴いてジグメ・プンツォクを迎え、ダラムサラへ案内した。

【5月24日】ダラムサラの南嘉寺に到着。ダライ・ラマも出席し、歓迎式典を開催した。ダライ・ラマは先代の銀貨と黄金マンダラをジグメ・プンツォクに献上し、灌頂を願い出た。

【5月25日】ダライ・ラマとジグメ・プンツォクは、レーラブ・リンパの「金剛極密宝剣」に基づき、南嘉寺で盛大に法会を催した。

【5月26日】ダライ・ラマとジグメ・プンツォクは食事をしながら、先代同士の宿縁について膝を交えて語り合い、ダライ・ラマはジグメ・プンツォクに長寿仏を贈った。午後、ジグ

メ・プンツォクはダライ・ラマに「文殊大圓滿」の灌頂を行った。

【5月27日以降数日間】ジグメ・プンツォクはダライ・ラマに、「文殊大圓滿」と「大圓滿三要訣」（華智リンポチェ）の講義を連日行った。

ジグメ・プンツォクの先代レーラブ・リンパがダライ・ラマ13世の導師を務めた関係から、14世はジグメ・プンツォクに特別の敬意を払いながらも、二人は旧知のごとく打ち解けていたと伝えられている³³⁾。図10はジグメ・プンツォクがダライ・ラマに灌頂を行っている場面である。この写真は2004年頃まで「喇榮仏網」のウェブサイトに掲載されていたが、2006年9月現在、このサイトは閉鎖状態にある。



図-10 インド・ダラムサラにて、ダライ・ラマ（右）に灌頂を行うジグメ・プンツォク（左）

Fig.10 Dalai Lama and Jigme Phuntsok

ジグメ・プンツォクが1990年にダライ・ラマを訪問したことを、中国政府はもちろん把握していた。ダラムサラへ向かう前、ジグメ・プンツォク一行はインドの中国大使館で手続きを行ったことを側近のケンポ・ソダジが記している³⁴⁾。1990年といえば、ダライ・ラマがノーベル平和賞を受賞し（1989年）、チベット問題が世界の注目を集めた翌年である。中国政府はジグメ・プンツォクの行動を、「チベット亡命政府の『祖国分裂活動』と係わる政治的意図あり」と問題視することも可能であったが、直ちに圧力や制裁を加えることはしなかった。その理由は、当時中国政府が民主化運動を制圧した天安門事件（1989年）を経て、西側諸国から人権弾圧を非難され、国際社会からの孤立

に直面していたからである。国内の事情としては、チベット人に信頼の厚いパンチェン・ラマ10世が自ら五明仏学院の果たす重要な役割を訴えて認可に尽力したことが、ジグメ・プンツォクと仏学院の保護につながったと考えられる。

7. 発禁本『ニンマの紅い輝き』

7.1 発禁処分

1999年5月、陳曉東著『ニンマの紅い輝き』（『寧瑪的紅輝——今日喇榮山中的一塊密乘淨土』甘肅民族出版社、1999年4月出版）が発禁処分を受けた。版元は6,000冊の印刷を終え、販売ルートに乗せる直前であった。処分を下したのは国家新聞出版署、ここはすべての刊行物を管理する国務院直属の部署である³⁵⁾。同時に、今後国内の出版社にこの書籍の出版を禁止する通達を出した。このニュースはワシントンのメディア「小参考Daily News」第440期（1999年5月31日）がウェブサイト上にいち早く掲載した³⁶⁾。

作者の陳曉東は1950年上海生まれ。復旦大学卒業後、政府機関勤務を経て、1987年に上海作家協会に加入した。1992年済塵法師（1902年～2002年）に師事し、1995年以降、何度も東チベット各地の信仰の現場を訪ねて歩いた³⁷⁾。1995年8月に五明仏学院へ取材に赴き、1996年4月『ニンマの紅い輝き』を書き上げた。1997年夏、仏学院を再訪し、ジグメ・プンツォク院長及び幹部僧たちの意見を参考にして改稿を行った。陳曉東は直ちに出版社との交渉に入り、1997年に上海仏学書局及び青海人民出版社と契約直前の段階まで話を進めたが、いずれも不成立に終わった。陳曉東が過去に江沢民の私生活を書いて生じたトラブルが原因であった³⁸⁾。

陳曉東は発禁処分を不服とし、1999年7月、北京市第二中級法院に提訴したが、裁判所は却下した。10月、北京市高級法院に上訴したが再び却下された³⁹⁾。そこには中国社会の不透明な三権分立及び行政と司法の癒着が見られる。

『ニンマの紅い輝き』は党や政府の宗教政策を批判したものではなく、ダライ・ラマ14世への支持を表明したものでもない。筆者は政府が発禁処分を下した理由は三つあると考える。

一つ目は作品に都市部の漢人知識層がチベット仏教に傾倒するさまが詳細に描かれていることである。しかもチベット仏教徒である作者は、その

ことを共感をもって肯定的に描いている。とりわけ知識人が出家することでチベット仏教を支える漢人の基盤が強固になり、チベット亡命政府に有利に働くことを中国政府は嫌ったのである。

二つ目は陳曉東の「前科」である⁴⁰⁾。彼は上海市党委員会に勤務していた頃、同僚の黎洪山とともに発表した文章が批判を受け左遷されてしまった。タイトルは「われわれの目に映った江沢民」(洪山・曉冬「我們眼中的江沢民」『文匯月刊』1990年第3期、洪山は黎洪山の筆名、曉冬は陳曉東の筆名)。1980年代に上海市長・上海市党委員会書記を歴任した江沢民の家庭生活に触れたことが原因であった。内容は江沢民の食の嗜好や家計状況、孫の託児所問題、家政婦、夫人の病気等である。いずれも江沢民を誹謗中傷する内容ではなく、上海市長の質素な生活を温かい目で描いたものであった。しかし、この文章が江沢民の逆鱗に触れ、『文匯月刊』は発行後直ちに回収されることとなった。

続いて1993年には、陳曉東が「八十年代上海文壇の内幕」(「八十年代上海文壇内幕」)の原稿を携えて、深圳で開催されるオークション(1993首屆全国優秀文稿拍賣活動)に向かおうとしたところ、上海駅で身柄を拘束されるという事件が起こった。公安はすぐさま家宅捜索を行い、パソコン・フロッピー・書簡・ノート等を押収した。「八十年代上海文壇の内幕」の中に「総書記のおかげでひどい目にあった」(「総書記叫我倒了霉」)という文章が含まれていたからである。9ヶ月間留置所に収監された後、1994年8月国家重要機密漏洩罪により執行猶予1年が言い渡された⁴¹⁾。同じく1994年、陳曉東の党籍が剥奪された⁴²⁾。一連の事件の真相は不明であるが、『文匯月刊』の一件後、陳曉東の言動は政府によって厳しく監視されることになった。彼と江沢民のトラブルが『ニンマの紅い輝き』発禁処分につながったのである。

三つ目は法輪功問題である。発禁処分が出される1ヶ月前に、法輪功の信者約一万人が北京の天安門・中南海周辺で座り込みを行い、当時の朱鎔基首相に面会を求めた(1999年4月24日)。民衆の自発的な大規模抗議デモは党と政府に強い衝撃を与え、当時の江沢民総書記は教団を非合法化し、全国で信者を逮捕するよう指示を出した。

この法輪功問題が間接的に『ニンマの紅い輝き』に悪影響を与えたと考えられる。法輪功が仏

教系の新興教団であること、教祖李洪志の指導力が強大であること、都市部の信徒が連絡にコンピューターネットワークを活用したこと、信者には知識人・元軍人・元公安関係者等が含まれていること等、五明仏学院と法輪功に類似点が多数あることは事実である。政府は都市部の知識人がジグメ・プンツォク法王を慕って相次いで出家している事実に敏感になっていた。また、こうした現象が隣接するチベット自治区や青海省に波及することも警戒していた。法輪功事件の余波が『ニンマの紅い輝き』にも及んだと考えられる。

7.2 漢人僧尼

『ニンマの紅い輝き』は、五明仏学院で学ぶ若い有能な漢人僧尼の熱意と苦悩を描いた物語である。特に理系の知識人がチベット仏教の教義に関心を持ち、高僧に心酔するという内容は、現代の世相を映し出した刺激に満ちたものであった。1997年、ジグメ・プンツォク学院長は出版にあたり「読者への言葉」を贈って、何度も取材に訪れた陳曉東の労をねぎらった。

作品の第22章に登場する戒圓と名乗る出家人を紹介する。

彼は1980年代前半に北京大学で物理学を学び、母校の研究所に職を得た後、アメリカへの留学を志していた。学生時代から気功という古来から伝わる心身鍛練法と仏教の教理に強い関心を持っていた。順調な人生を歩んでいたある日、彼に突然転機が訪れた。五明仏学院の高僧が北京へ来たことを知って会いに行ったのである。このことがきっかけとなり、彼は冬休みを利用して色達へ向かいジグメ・プンツォク法王との再会を果たした。出家を決意するとすぐさま北京へ戻り、職場に休職願を提出した。その直後にアメリカの大学から合格通知を受け取ったが、決意は変わらなかった。学院に到着すると、これまでの預金をすべて法王に捧げて退路を断った。留学先の大学が年間14,000ドルの奨学金を準備していたことを後で知ったが、彼の決意は揺るがなかった。

作品には彼のような知識人が何人も登場する。作者はチベット仏教への帰依を通して、知識人の新たな思考と行動を描くことに成功した。しかし逆に、政府の公安部門は若い彼らがチベット仏教という異民族の宗教にのめり込んでいく現実に近い危機感をもったのである。少数の者が入信する

のは見過ごせるが、作品が話題を呼び布教の種がひろく撒かれることは阻止しなければならない。このような危機感が発禁処分につながったのである。

題名「ニンマの紅い輝き」の「ニンマ」とは、チベット語で「古い」を意味する。ここではチベット仏教四大宗派のなかで最も歴史の古いニンマ派を指している。「紅」は「人気がある」という意味の他に、ニンマ派を表す漢語「紅教」「紅帽派」も兼ねている。作品名からは、「チベット仏教の信仰を通じて、チベットと漢二つの民族の心が通じ合った輝き」というニュアンスも読みとれる。

7.3 陳曉東の苦悩

陳曉東と『ニンマの紅い輝き』に対する当局からの有形無形の圧力はその後も続いた⁴³⁾。台湾におけるチベット仏教への関心の高まりを背景に、1999年と2002年に台湾の出版社が陳曉東に出版を約束したが、二度とも計画は立ち消えとなった。中国の発禁本を台湾で出版することにより、中国とのビジネスに悪影響が出ることを出版社が嫌ったからであった。2000年には、武漢の在家信徒（聖威徳公司董事長鄧居士）から資金援助を受けて、作品の私家版数千冊を無料配布したことを公安局が察知した。公安局員はすぐさま違法出版の嫌疑で、その信徒（鄧居士）の家宅捜索を行い身柄を拘束した。

2000年3月、オーストラリア在住の弟を訪ねる目的でパスポートを申請したところ、当局の執拗な嫌がらせにあうという出来事もあった⁴⁴⁾。2001年以降、陳曉東は自らのホームページに『ニンマの紅い輝き』を掲載し、積極的に内外の出版社に出版契約の呼びかけを行なったが実現に至っていない⁴⁵⁾。

8. 漢人信徒

8.1 大連からの出家者（2001年）

筆者は二度の仏学院滞在中、何人もの漢人信徒と出会った。聞き取り調査の協力が得られた中から、3人の信徒を紹介する。

筆者が喇栄（ラルン）の谷を歩き仏学院に向かっている途中、二人の漢人に出会った。一人は山西省五台山からやってきた年老いた尼僧、もう一人は遼寧省大連から来た中年男性であった。その男性は若い頃、日本企業の進出がめだつ大連で日本語を学び、日中貿易に従事することで祖国の発

展に貢献する夢を持っていた。しかし、卒業後夢は叶えられず、大連郊外の中学校で国語教師となった。彼は筆者に語った「教師をしていた20年間に政治はまずまず安定し、生活は豊かになった。しかし拝金主義の風潮が強まる中で、人間不信に陥ってしまった。しだいに疲れがたまり、心に大きな穴があいてしまった。その穴をふさいでくれるのはジグメ・プンツォク法王しかいない」と。

だがこの時、学院長は当局の指示で成都での療養生活を余儀なくされていた。男性はそのことを大連にいる友人の信徒から聞いていたという。彼はテンジン・ギャムツォ副院長に出家を願い出ると言っていた。すでに家族の了解を得て、職を辞してきたということだ。

8.2 深圳と山西省からの信徒（2004年8月）

仏学院の丘の上に、学院が管理する3階建ての招待所がある。部屋数は約120あり、外部からやってきた漢人信徒や僧坊を失った尼僧がひっそりと生活している。筆者はこの招待所に滞在中、廊下をはさんだ向かいの一室で共同生活を送る二人の女性信徒と出会った。

一人は深圳から来たコンピューター技術者で3ヶ月の滞在を予定、もう一人は山西省出身の航空関係の研究者で半年間の滞在を予定していた。二人とも年齢は20代後半、理系の知識人という共通点をもっており、学院内で知り合ったと言う。共同で借りている北向きの質素な部屋（1ヶ月家賃400元）には、ベッドとプロパンガス、調理台があるのみ。招待所に電気は通じているが、トイレは建物の外にあり、水は離れた場所の井戸を利用しなければならない。家賃を除く生活費は二人で月に400元あれば十分とのこと。

二人は朝5時に起床し、漢人への指導を担当しているソダジ導師から講義を受けている。彼女たちはチベット語ができないが、ソダジは漢語訳の教材を用いて漢語で講義を行うため、特に不自由は感じていない。出家するか否かを真剣に考えていた。

仏学院事件について質問したところ、「ネット上で知った。政治的な問題は今後も起こるであろう。我々もいつまでここにいられるかはわからない。ただし、漢人信徒のニンマ派信仰のうねりを政治が止めることは難しい」と語った。

この招待所が建てられる以前、僧坊を持たない

漢人は1993年に完成した「漢僧顯密經堂」で寝起きしていた。その後、漢人数の増加にともない経堂は手狭になり、1996年頃に新たな漢経堂が建設された。これはジグメ・プンツォクが提案したことであり、学院長は漢人修行者に月額80元の生活費も支給していた⁴⁶⁾。筆者が2001年12月に仏学院で確認したところ、事件のさなかに漢経堂は取り壊されたと聞いた。

9. 事件の真相

9.1 陰法唐の仏学院視察

アメリカのメディアは、この五明仏学院の盛況を問題視し圧力をかけるよう働きかけたのは陰法唐（1922年生）であると伝えている⁴⁷⁾。陰法唐はかつてチベット自治区党委員会書記を務めた実績を持つ政治家である。彼は1999年に仏学院を視察した際、谷の四方をびっしり埋め尽くした僧坊と僧尼を見て唖然とした。自治区で宗教管理に敏腕をふるってきた陰法唐にとって、仏学院の現状を放置・黙認することはできなかった。さっそく北京へ戻ると、江沢民総書記に視察内容を報告し、仏学院に制裁を加えることと、四川省の宗教政策を自治区なみに強化する必要性を訴えた。彼はこの時、仏学院がチベット独立運動の温床となる危険性を感じており、1990年にジグメ・プンツォク学院長がダライ・ラマ14世と接触したことも知っていた。

陰法唐が視察を行った当時、仏学院は一万人前後にも及ぶ過去最大数の僧尼・信徒を抱えていた。ここで大事な点は、五明仏学院は四川省政府から宗教教育機関として正式に認められており、一般の寺院とは管理形態が異なることだ。一般の寺院は政府によって僧尼の定員が厳しく制限されているが、教育機関である仏学院に明確な定員は設けられていない。『色達県志』（四川人民出版社、1997年）には、五明仏学院は宗教活動を行うことが許された「民設教育機関」（私立学校）と記されている（146頁・424頁）。僧尼にしろ在家信徒にしろ、多くの場合学院に在籍する期間は数ヶ月から数年間である。このような事情から、党や政府の学院に対する規制・管理は比較的緩やかであった。しかし、これほど大規模な仏学院は、チベット自治区内にも存在していない。陰法唐が巨大化した仏学院と僧尼の大集団に過敏に反応したのも無理はない。

陰法唐はかつて解放軍で辣腕をふるった將軍でもあり、仏学院にとって極めて都合の悪い人物であった。1950年の昌都（チャムド）侵攻、1959年のチベット動乱、1962年の中印国境軍事衝突を前線で指揮した輝かしい軍事實績を有しており、党のチベット政策に大きな発言力をもっているからである⁴⁸⁾。

9.2 周永康と四川省統戦部

陰法唐の江沢民への進言は党中央から四川省へと伝えられた。2000年1月、江沢民と縁戚関係にある周永康が四川省党委員会書記に任命された。周書記の指示で仏学院への弾圧を実行したのは、宗教政策を担当する四川省統戦部（中国共産党四川省統一戦線工作部、当時の統戦部長は肖光成）であった。四川省統戦部は四川省党委員会の事務機構であり、民主諸党派や党外組織と協力関係を結ぶことが主要な任務であり、あわせて民族問題の処理、宗教対策、知識人対策も担当している。

この仏学院事件には、広西チワン族自治区の統戦部も応援に駆けつけていたことがわかった。南寧市政府ウェブサイト上の「違法宗教活動の取り締まり」（2001年）にそのことが記されている⁴⁹⁾。

四川省統戦部は学院長のジグメ・プンツォクに対して学僧の大幅削減を幾度か命じたが、学院長は信仰の自由と教育の重要性を盾にとり命令を拒否してきた（2000年）。そこで統戦部は仏学院内に「工作組」と呼ばれる管理事務所を設置し、学院の運営と学院長の行動に一段と目を光らし始めた。その後、統戦部は法王の学院外での宗教活動を禁止し、在籍する学僧数を1,400人（男僧1,000人、尼僧400人）に減らすよう指示した⁵⁰⁾。しかし学院長は再び削減命令をはねつけたため、業を煮やした当局は2001年夏に、僧坊を破壊し多数の僧尼を放逐するという強硬手段に出たのである。その時、当局の非道な行為に抗議して数名の尼僧が自ら命を絶したが、彼女たちの悲痛な叫びは天に届くことはなかった⁵¹⁾。そして2001年秋、色達県公安局は学僧の戸籍と居住証の管理を強化する通達を出し、尼僧が再び戻ってくるのを防ぐ措置を講じた。

窮地に追い込まれた仏学院はなす術もなく、事態が落ち着くのを待つしかなかった。心労と持病の悪化が重なった学院長は、当局の命令により約

700キロメートル離れた成都での治療を余儀なくされた。1年間にも及ぶ成都での療養生活には、ジグメ・プンツォクを隔離・監視することで宗教的指導力の低下を狙った統戦部の思惑が見え隠れしていた。四川省内のチベット仏教では、白玉（ペユル）県の亜青（ヤチェン）修行地（亜青寺）を主宰するアチュウ・リンポチェの動向にも四川省政府は敏感になっているが、その詳細については他稿で論じる。

政府の宗教政策の柱は、「19号文件」にあるように「宗教信仰の自由を尊重し保護すること」である。しかしその一方で、政府は各宗教組織の人員削減にも力を入れている。チベット仏教の場合、新たな大規模寺院の建立は許されず、各寺院の僧尼数は厳しく定められている。同時に海外組織からの資金の調達と情報の流入にも政府は目を光らせている。

周永康が仏学院への弾圧を行った背景には、党中央からの指示もあったが、政治の世界ではチベットやウイグルといった民族地区での統治実績を高く評価する傾向があるからだ。実際、周永康書記は数度にわたりカンゼ州各地を視察し、具体的な指示を出してきた。現在の胡錦濤総書記もチベット自治区党委員会で書記を務めていた時、1989年にラサに戒厳令を敷き、僧侶や民衆による大規模デモを制圧した政治実績をもっている⁵²⁾。周永康書記は在任中（1999年12月－2003年3月）、省内のチベット仏教勢力への管理強化だけではなく、法輪功信者の摘発・弾圧にも熱心であった。迫害を受けアメリカに逃れた被害者の一人が、2001年8月、周永康の訪米中に彼を告訴したほどである⁵³⁾。

その後、周永康は第16回党大会を経て、党中央の指導組織である政治局委員に抜擢された（2002年11月）。引き続き全国人民代表大会では公安部部長に就任し、警察を統轄する部署のトップに立った（2003年3月）。2004年8月、五明仏学院の僧侶と色達県宗教局の元局員に確認したところ、周永康が四川省を離れた後、仏学院は徐々にかつての平穏な日々を取り戻しつつあるということだ。

10. ジグメ・プンツォクの入寂

2004年1月7日（チベット暦2003年11月15日）、ジグメ・プンツォク学院長が成都で入寂した。訃報が伝えられると、仏学院には大きな衝撃が走り緊張が高まった。体調不良は数年前から伝

えられていたが、2003年末、成都の病院で心臓手術を受けた1週間後に容態が急変し、側近の僧侶に見守られながら70年に及ぶ生涯の幕を閉じた。手術は成功と伝えられていただけに、治療を装った政府による暗殺説も流れた⁵⁴⁾。

ジグメ・プンツォクはチベット仏教圏で最大規模を誇る五明仏学院の創始者兼学院長であり、東チベットのニンマ派（チベット仏教四大宗派の一つ）を束ねる大黒柱でもあった。その影響力は東チベット一帯の僧侶や在家信徒のみならず、中国都市部の漢人信徒、東アジアに暮らす華僑にまで及んでいた。

訃報をその日のうちに伝えたのはインターネットであった。インドのチベット亡命政府は、ダライ・ラマ14世の特使ギャリ・ロディが弔辞を発表した⁵⁵⁾。

ケンポ・ジグメ・プンツォクの遷化は、チベットにとっても中国にとっても大きな損失である。それは彼が中国の漢人僧尼に仏教を伝授し、漢人とチベット人の相互理解と親交を促したからにほかならない⁵⁶⁾。

ジグメ・プンツォクが五明仏学院で、漢人僧尼に仏教を伝授したことは確かである。学院の活動を通して、漢人僧尼や信徒のチベット仏教への理解が深まったことは、ジグメ・プンツォクの大きな功績であり学院の財産でもある。チベット亡命政府は現在、中国政府との関係改善に向けた協議を進行中である。「漢人とチベット人の相互理解と親交」という文言には、協議の進展を期待する政治的メッセージも込められているであろう。

中国の漢人信徒はニンマ派の支援ネットワークを利用して、台湾の信徒はダライ・ラマ支援組織を通じて訃報を伝えた⁵⁷⁾。中国国内でチベット亡命政府関連のサイトを閲覧することは不可能であるが、チベット仏教の漢人信徒が運営する各種サイトの閲覧は可能である。ニンマ・インフォメーション（寧瑪資訊）のウェブサイト内に設けられた「ニンマ論壇」（寧瑪論壇）には、法王が入寂した日の夜になると、信徒の悲痛な叫びが続々と掲載されはじめた。日本では翌日になって、チベット情報を扱うメーリングリスト「リンカ」にニュースが載せられた⁵⁸⁾。

一方、中国政府は新聞・テレビ・ラジオ等、各

種メディアで法王関連のニュースを報じた形跡はない。確認できた範囲では、中央統戦部がウェブサイト上にニュースを短く載せていたにすぎない⁵⁹⁾。そのニュースソースは「新華網・成都・1月13日電」となっていた。死後6日目ようやく報道されたのは不自然であり、統戦部は周囲の状況を見極めつつ、混乱の回避を慎重に検討していたと思われる。

そして、地元四川省の公安局・宗教局・統戦部といった宗教活動を管轄する部署は、法王の容態と側近の行動を把握していたため、迅速に行動を開始した。五明仏学院へ通じる道路に交通規制を敷いて、僧侶や信徒の動きを封じ込めてしまった⁶⁰⁾。

11. 学院長の遺言

2003年頃より学院長は身体の不調を深刻に受けとめていた、極楽法会（チベット暦9月に五明仏学院で行う大規模な行事）の際に、「これが最後の大きな法会になるかもしれない」と語っていたそう⁶¹⁾。糖尿病に高血圧、そして心臓疾患が重なり、古稀を迎えた法王の肉体は悲鳴を上げていた。仏学院の運営に対して当局が圧力と制裁を強めるなか、学院外での法王の宗教活動は著しく制限されていた。加えて、11月に妹（美珠空行母）が他界し、法王は心身ともに疲労の極に達していた⁶²⁾。

ジグメ・プンツォクが成都の病室で過ごした最後の3日間の様子や遺言がネット上で公開されている（2004年1月23日）⁶³⁾。テンジン・ギャムツォ副院長の名前で示されていることから、漢人信徒を安心させ混乱を最小限にとどめたいという学院執行部の意図が感じられる。

ジグメ・プンツォク遷化から2日後の1月9日、ネット上の「ニンマ論壇」に五明仏学院からのメッセージが載せられた。要約すると「仏学院は平静を保っている。ケンポ・ソダジ（仏学院の幹部僧）の講義は通常通り行われている。学僧は落ち着いて学問と修行に励みなさい。今後数ヶ月間は学院から離れないように」という内容であった⁶⁴⁾。

私がこの世を去っても、そのことで皆が仏法への信心を失わないことを切に願っている。五明仏学院は何としても存続していかねばならない⁶⁵⁾。

これは公開された遺言の一部である。「五明仏学院は何としても存続していかねばならない」という言葉に、学院長自身の追いつめられた心境の一端が伺える。つまり、四川省政府が仏学院と学院長に対して行ってきた政治的な圧力の厳しさを物語っている。同時にこの遺言には、政府の圧力に屈することなく今後も仏学院を守り抜くという学院幹部の並々なぬ決意が込められていると解釈できる。

法王の遺体が成都の病院から仏学院へ運ばれた後、近隣の僧侶や信徒は長い道のりを徒歩で移動し、裏山を越えて仏学院を目指した。当局は直ちに彼らが遺体と対面することを禁じる措置を出して対抗した。公安局が仏学院のある色達（セルタ）行きバスの運行を停止させて交通規制を敷いた理由は二つ考えられる。一つは遠方の信徒が多数殺到して混乱が生じるのを避けるため。もう一つは法王の死を契機に、集まった僧侶や信徒が当局の過剰な干渉に対して抗議行動を起こすことを心配したからだ。逝去の当日と翌日に、訃報はコンピューターネットワークを通じて漢人信徒の間を盛んに行き来していたことを当局は察知していた。

その後、どのような様式で学院葬がとりおこなわれたのか不明であるが、法王の居室前に安置された棺の写真が仏学院に出まわっていた。アメリカのメディアは、法王の遺体が逝去から二週間後に火葬されたと伝えている⁶⁶⁾。

チベットでは高僧の遺体は火葬せず、特殊な処理を施して寺院に安置するのが一般的である。仏教儀式をへた遺体は仏となり、永く信仰の対象となる。火葬が事実であるならば、それは政府の強い指示であり、法王の影響力を弱める意図があったと考えられる。

12. 苦悩の活仏

12.1 最初の訪問（2001年12月）

筆者は五明仏学院で二度調査を行った際、テンジン・ギャムツォ活仏を訪問する機会に恵まれた。活仏は1968年生まれ、四川省アバ州紅原県出身。索倫貢布活仏の転生者であり、1987年五台山でジグメ・プンツォク法王と出会い、五明仏学院に招聘されメワ寺を離れた⁶⁷⁾。以後、副学院長としてジグメ・プンツォクを補佐する任務についた。

案内されたのは彼の寝室を兼ねた執務室であっ

た。多数の經典や書籍に囲まれ、部屋の隅にはパソコンもあった。活仏は日当たりのよいテラスで身体を横たえていた。彼も学院に降りかかった混乱による心労から、体調をくずしていたのである。筆者は事件の経過と学院が直面している危機について質問してみた。活仏は驚くほど流暢な漢語で回答してくれた。以下に要約して示す。

政府から指導があり、僧坊の一部が撤去されたのは事実である。尼僧の今後の生活については大変心を痛めている。仏学院が存続するには、政府との関係は慎重に考えなければならない。現在のところ、学僧の生活は落ち着いており学院の運営に問題はない。僧尼一人一人が動揺することなく、しっかり修行することがなによりも大切である。外国人の修行情況については答えることができない。

彼は学院の責任者として、外国人に不用意な発言をすることは許されない立場にある。言葉を選びながら丁寧に應對する活仏の表情には苦渋の色が浮かんでいた。

12.2 二度目の訪問（2004年8月）

僧坊の入口には「健康上の理由により、面会は正午と夕方に限る」という貼り紙があった。正午に訪問すると、活仏は寝室で食事中であった。3年前と比べて頬が少しこけたように感じられた。活仏はジグメ・プンツォクの片腕としてこれまで仏学院の運営に奔走してきたが、ここ数年の学院を取り巻く緊迫した状況は若き活仏の心に重くのしかかっていたに違いない。学院長遷化による心労も加わり、活仏の心はくもりがちであった。

二度目の訪問であることを告げてあいさつをした後、時間の制約もあるため単刀直入に仏学院の現状について質問してみた。以下に要約する。

法王入寂直後に複数の情報が交錯し、学僧たちに混乱が見られたのは確かである。半年余りを経た現在、仏学院の状況は落ち着いており大きな問題はない。法王にかわる新たな学院長は就任しておらず、複数の幹部僧が知恵を出し合い集団指導体制をとっている。これまで通り各部署の責任者が指導力を発揮することで、学院の運営は安定するはずだ。

筆者は「学院は現在大きな問題を抱えていない」という活仏の言葉を文字通りに受けとめることはできなかった。学院に通じる村の入口に色達

（セルタ）県公安局が検問所（流動人口検査所）を設けていることが、何よりも事態の深刻さを物語っているからだ。僧尼以外の者はここで身分証明書を提示して登録を行い、カメラ等の撮影機具を預けることが義務付けられている⁶⁸⁾。外国人の訪問はもちろん禁止されている。学院への車の乗り入れも指定車輛のみに許されている。ただし、アリのはい出るすきもないほど厳重な警戒をしているわけではない。チベット人の警官は仏教を敬う気持ちを大切にしているため、四川省政府の指示に対して、時として面従腹背の姿勢を見せることもある。

続いて法王追悼行事についてきいてみた。すると、「大がかりな行事は予定していない。理由は経済的な問題と、もう一つの複雑な問題があるからだ。次回あなたが仏学院を来訪した際には、法王の記念アルバムを贈れるといいのだが」と答えお茶を濁した。もう一つの問題については具体的な内容を一切語らなかった、いや語れなかったのである。それは明らかに政治上の敏感な問題であり、法王の入寂を機に仏学院の更なる規模縮小を進めたい当局の思惑が、追悼行事の前に立ちはだかっているのである。

大規模な行事は難しいが、学院内外の商店では生前の学院長の姿を収めたビデオCDが複数発売されている。アメリカや東南アジアを歴訪した時のもの、国内の漢人居住区での法要の様子、色達の夏祭りを見学する姿等、在りし日の貴重な映像である。いずれも法王の側近が撮影した映像をパソコンで編集した私家版であるため、色達県や隣接する壤塘（ザムタン）県の個人商店でしか販売されていない。目立ちほしくないが、学院が関わったささやかな追悼である。

最後に少し踏み込んだ質問をしてみた。それは近い将来、外国人信徒が仏学院で仏法を学ぶことが許されるか否かについてである。活仏は「それは時の運が決めること」と明快に答えた。「時の運」とは政府の宗教政策の動向を指しており、活仏の胸の内を推し量るのは難しいことではなかった。つまりその時、政府の監視が緩やかであれば可能性はあるし、厳しければ不可能である。色達県公安局で滞在許可が得られるか否かが鍵となる。

13. 信仰と経済効果

現在仏学院に在籍が許可されているのは、基本的には四川省色達（セルタ）県に戸籍を持つ僧尼・信徒のみである。ただし、県公安局が定めた管理規定の運用方法は常に一定しているわけではなく、担当者の恣意的な判断が優先されることが多い。「上に政策あれば、下に対策あり」（「上有政策，下有対策」）という中国の諺が示す通り、僧尼たちは導師からの援助や地縁血縁等さまざまな方法を用いて仏学院に戻ってきている。2004年夏の時点で、学僧数は最盛期2000年当時の3分の2程度にまで回復していた。ただしその後、新たな僧坊の建築は許されていない。各僧坊は個人の所有物であり、居住者間で売買ないし譲渡されている。県公安局員の大多数はチベット仏教徒（チベット人）であり、四川省政府の指示にすべて従っているわけではない。管理規定よりも僧尼の信仰心を尊重することもある。色達の仏教徒にとって五明仏学院は、心の拠り所なのである。

午後4時が近づくと、僧尼は部屋に戻りラジオに耳を傾ける。流れてくるのは仏学院のケンポ（仏教学博士）と呼ばれる指導僧の読経や講義である。学院内の放送施設から発せられた弱い電波は、谷全体の各僧坊へ行き渡っており、外出している間は耳に携帯ラジオをあてている者も見かける。ふだん学ぶ機会のない学院のケンポが行う法話や講義を毎日聴くことが可能であり、高い教育効果をあげている。

仏学院の谷間には一本の細い川が流れており、川の周囲には雑貨屋・食堂・肉屋・八百屋等、30余りの商店が軒を連ねている。3年前は10軒にも満たなかった。学院直営の大型商店もあるが、大半は個人商店であり、四川省各地からやってきた漢人が経営している。広い僧坊群は男僧区と尼僧区に分かれており、互いに立ち入りが禁止されている。この商業区域は誰もが利用できるようになっているが、尼僧区の中には尼僧専用の商店も数軒並んでいる。

商業活動が活発になるにつれて、僧尼が学院内で漢語を使う機会が飛躍的に増えているように感じた。漢人の店主や乗合タクシー運転手はチベット語をほとんど解さないため、チベット人僧尼は買い物の際などに漢語を使う必要に迫られる。日常生活以外でも、ラジオから社会情勢を聞いたり、漢人の会話を理解するにはある程度の漢語運

用能力は不可欠である。若い僧侶の中には、「漢語は自分の身を守るためには不可欠」と言い切る者もいる。

食堂は主に豚肉や牛肉を使った四川料理を出しており、アルコールも提供している。「喇榮飯店」（「ラルン食堂」、「喇榮」は仏学院周辺の村名）の中をのぞいて見ると、視察に訪れた幹部（主に観光目的）や僧侶で賑わっていた。僧侶の中には牛肉を食する者もいる。

各商店には公衆電話が置かれており、国際通話も可能になっていた。国際通話が認められているということは、仏学院に対する当局の管理状況は欧米のチベット支援団体が非難するほど厳しくないことを示している。男僧の居住区内と尼僧の経堂前には、ICカードやIPカードが使える公衆電話も設置されていた。僧侶が所持する携帯電話から電子メールの着信音を聞いたことがある。中国電信の電波は、仏学院へも確実に届いている。ただし、コンピューターネットワークへの接続は無理である。ラジオ放送にしろ国際電話にしろ、学院内の通信網の変化は想像を超えた驚きであった。

これだけの規模の商業活動が成り立つ背景には、学僧の生活水準の向上と学外からの人の往来がある。年に4回開催される大法会の際には、近隣や遠隔地から僧尼や信徒が多数押し寄せてくる。その数は一度の法要で一万人を超えることも珍しくない。仏学院の活動が交通機関（バスやタクシー）、宿泊施設（招待所）、通信網（電話や手紙）等の発達を大きく促していることは注目に値する。

学院の位置する色達県は四川省内でも有数の貧困地域であり、1990年代以降の急激な経済開発とはまったく縁がなかった。漢人から見て観光資源に乏しいため、道路整備も大幅に遅れてしまった。しかしここ数年来、県の経済活動は徐々に活発になりつつある。色達の景気を刺激しているのは、仏学院を中心とした経済活動の広がりである。当局が仏学院への管理を強化していることは確かであるが、学院を閉鎖へと追い込まない理由の一つは、学院が地域にもたらす大きな経済効果を見逃せないからである。仏学院は「信仰を中心とした地域社会の安定」と「地域経済活動の発展」を支える上で重要な役割を果たしていると筆者は考える。

14. 仏学院の新たな課題

現在、五明仏学院を悩ませているものが二つある。一つは先に述べた党・政府による管理強化であり、もう一つは信仰心を持たない訪問者の存在である。その訪問者とは主に、外国人旅行者や漢人カメラマンを指している。

中国では改革開放政策の進展とともに、都市部住民の観光熱が高まりを見せている。なかでも、沿海部を中心とした漢人がチベット自治区を訪れる団体旅行は異常なほどの過熱ぶりである。所得の向上、大型連休の定着、航空路線網の拡充、旅行代理店の増加といった要因が、国内観光産業という巨大な市場を形成しつつある。ラサ行きの定期便をもつ国内都市は10を数えるまでになった。成都ラサ間は一日に3便から5便の大型機が飛ぶドル箱路線に成長している。

一方で、世俗化したラサ観光に飽きたらない若者や写真家が、新たな秘境を探して四川省や雲南省のチベット圏を目指し始めている。四川省では甘孜チベット族自治州やアバ羌族チベット族自治州を指している。自由旅行を意味する「自助游」やバックパッカーを意味する「背包族」という新語も定着してきた。プロ・アマを問わず、カメラマンたちがランドクルーザーをチャーターして悪路をひた走る姿は珍しくなくなってきた。

四川のチベット圏でも観光化の波は急速に押し寄せているが、陸路を長距離移動するため、九寨溝・黄龍方面を除けば団体客を乗せたバスを見かけることは少ない。カメラマンが追いつめているのは手つかずの自然と素朴な人情、そして人々の祈りの姿である。

1998年7月という比較的早い時期に五明仏学院を撮影した報道カメラマンがいる⁶⁹⁾。中国共産党の機関紙である人民日報社に所属する許林（1945年生、満族）である。彼は2004年春にも仏学院の撮影に来ていることから、党が行った宗教政策の「成果」を記録したと考えられる。

仏学院に一般のカメラマンが出入りするようになったのは、2000年以降のことである。皮肉なことに仏学院事件がきっかけとなり、人煙まれな山奥の谷間にひろがる数千の僧坊群に一部のカメラマンが注目しはじめたのである。男性カメラマンが尼僧の生活区域に無断で入り込んだり、修行の様子を隠し撮りするなど粗暴な振る舞いが目立つため、僧尼は反感を抱いている。「成都の公安局員

がカメラマンを装って学僧を撮影している」という噂が流れるほど、カメラの視線が学僧たちの警戒心を高めていた。

仏学院の写真を正規の出版物に載せたのは、おそらく女性カメラマン張華が初めてであろう（張華『独行川西北高原』南方日報出版社、2003年）。仏学院を扱った第2部第8章は11頁よりなり、計12点の写真を収めている。そのなかで注目すべき写真が2枚あった。漢人僧尼の指導を担当している高僧ソダジと部外者の立ち入りを固く拒んできた「印経楼」（僧侶が手作業で経典を木版印刷している作業室）を撮影したものである。写真とともに筆者の手記も載せているが、僧坊破壊と僧尼追放の一件にはまったく触れていない。著書の主眼は、あくまでも深圳という都会に暮らす若者の目に映った異文化体験の紹介にあり、宗教と政治の敏感な関係を報告したものではない。中国では正規の出版物は政府が事前に内容を審査するため、仏学院が直面する厳しい現状を赤裸々を書くことはもちろん許されない。ただしインターネット上には、この問題に触れた漢人の仏学院訪問記がある⁷⁰⁾。最近の出版物では、鄭紅『天府聖域』（湖南文芸出版社、2004年）が、バックパッカー向けに写真入りで仏学院の紹介を行っている。

カメラマンにしろバックパッカーにしろ、彼らはチベット仏教への信仰心をもたない訪問者である。学院内での彼らの行動に学僧や修行僧への配慮はまったく感じられず、カメラのファインダー越しに映る僧尼の姿は風景を構成する一部分に過ぎない。ラサに殺到する旅行者も含めて、彼らは宗教に敵意と恐怖を抱き弾圧する側の人間ではなく、異民族の宗教と風俗に触れることで非日常的な時間と空間を楽しんでいるに過ぎない。「宗教に敵意を抱いていない無信仰者」という新たな来訪者とのように向き合っていけばよいのか。仏学院のみならずチベット全体が直面している切実な問題である。

15. 結論

仏学院事件は2000年から2002年の間に、四川省党委員会・統戦部、四川省政府によって引き起こされた。当局は流動人口の管理強化と治安消防上の理由から適切な指導を行ったと主張しているが、実際は仏学院に対する宗教弾圧であった。政府が仏学院を問題視した理由は、強いカリスマ性をもつジグメ・プンツォク院長の存在、学院の急速な規模拡大、漢

人（主に知識人）のチベット仏教への関心の高まりである。省政府は僧坊を撤去し、学僧を放逐することで、学院の規模縮小と学院長の宗教的影響力の低下を目論んだ。仏学院事件を通して、信仰の自由を保障する一方で活発な宗教活動を抑圧するという中国共産党の宗教政策が持つ二面性が明らかになった。四川省政府の仏学院への対応を観察することで、東チベットにおける党の宗教政策や統一戦線活動の動向を知ることができる。

【注】

- 1)『中国——社会と文化』第19号, 中国社会文化学会, 2004年6月, 7-30頁.
- 2)「寧瑪資訊」.
<http://www.nmzx.com/nmcl/wmfx.htm> [2003.9.10]
- 3)「普渡衆生」.
http://buddha.nease.net/browse/xueyuanjianjie/nmdhh_1.htm [2003.9.10]
- 4) <http://www.c-xd.net/nmdhh> [2005.3.23]
- 5)「色達県喇榮寺五明仏学院簡介」.
<http://www.nmzx.com/nmcl/wmfx.htm> [2003.9.10]
- 6)「色達喇榮五明仏学院」『藏族大辞典』, 甘肅人民出版社, 2003年, 678頁.
- 7)中共中央文献研究室・中共西藏自治区委員会編『西藏工作文献選編(1949—2005年)』中央文献出版社, 2005年, 338—355頁.
- 8)中共甘孜州委党史研究室編『中国共産党甘孜州歴史大事記』2004年, 91頁.
- 9)「色達県喇榮寺五明仏学院簡介」.
<http://www.nmzx.com/nmcl/wmfx.htm> [2003.9.10]
- 10)中共甘孜州委党史研究室編『中国共産党甘孜州歴史大事記』2004年, 104頁.
- 11)「色達県喇榮寺五明仏学院簡介」.
<http://www.nmzx.com/nmcl/wmfx.htm> [2003.9.10]
- 12)「色達県喇榮寺五明仏学院簡介」.
<http://www.nmzx.com/nmcl/wmfx.htm> [2003.9.10]
- 13)「四川省委統戦部召開形成報告伝達会」(2002年10月10日).
<http://www.zyztb.org.cn/dfxx/sichuan/tzdt/80200210160149.htm2> [2003.9.16]
- 14) *Country Reports on Human Rights Practices 2001 China (Includes Hong Kong and Macau) Released by the Bureau of Democracy, Human Rights, and Labor* March 4, 2002
<http://www.state.gov/g/drl/rls/hrrpt/2001/eap/8289>.

- htm [2003.10.15]
- 15)「蔵独人士放映色達仏学院被毀録像」(2002年4月19日)『美国之音中文網』.
<http://www.voanews.com/chinese/archive/2002-04/a-2002-04-19-22-1.cfm> [2006.9.26]
- 16)ダライ・ラマ法王日本代表部事務所.
http://www.tibethouse.jp/news_release/2001/index.html
http://www.tibethouse.jp/news_release/2002/index.html
- 17) Work teams in the process of demolition of homes at Serthar, July 2001.
<http://www.tibetinfo.net/reports/trel/sr5.htm> [2003.8.20]
Expulsions of nuns and students survival of important Tibetan Buddhist institute
<http://www.tibetinfo.net/news-updates/nu190801.htm> [2003.8.20]
「西藏即時新聞」にも写真「中共摧毀五明仏学院」が掲載されている.
<http://www.xizang-zhiye.org/gb/xzxinwen/zhaopian.html> [2003.9.10]
- 18)「新世紀の『宗教活動』四川省における党政策の実施」.
http://www.tibethouse.jp/news_release/2002/religious_work_Apr18_2002.html [2003.8.20]
- 19)「チベット仏教僧院長強制退去続報 文化大革命以来最大規模の文化破壊が目的」(2001年9月27日)による.
http://www.tibethouse.jp/news_release/2001/Khenpo_Jigme_Phuntsok_Sep27_2001.html [2003.8.20]
- 20)「西藏尼姑与公安人員發生衝突」.
<http://www.xizang-zhiye.org/gb/xzxinwen/0301/index.html#030107.2> [2003.10.15]
「ケンポ・ジグメ・プンツォク師, 成都に」.
http://www.tibethouse.jp/news_release/2001/Serthar_teacher_Chengdu_Nov08_2001.html [2003.9.20]
「新世紀の『宗教活動』四川省における党政策の実施」.
http://www.tibethouse.jp/news_release/2002/religious_work_Apr18_2002.html [2003.8.20]

- 21) <http://www.voanews.com/chinese/archive/2002-04/a-2002-04-19-22-1.cfm> [2006.9.26]
- 22) 「中共又在色達五明仏学院逮捕了四名藏人」.
<http://www.xizang-zhiye.org/gb/xzxinwen/0306/index.html> [2003.9.12]
- 23) <http://www.voanews.com/chinese/archive/2002-04/a-2002-04-19-22-1.cfm> [2006.9.26]
- 24) 中共中央文獻研究室・中共西藏自治区委員会編『西藏工作文獻選編(1949－2005年)』中央文獻出版社, 2005年, 343頁.
- 25) 「チベット仏教僧院長強制退去続報 文化大革命以来最大規模の文化破壊が目的」
(2001年9月27日).
http://www.tibethouse.jp/news_release/2001/Khenpo_Jigme_Phuntsok_Sep27_2001.html [2003.8.20]
- 26) 「普渡衆生」.
<http://buddha.nease.net/browse/zhuanji/fawang.htm> [2003.9.10]
- 27) <http://www.tjnw.com.cn/buddha/browse/zhuanji/fwgz.htm> [2006.9.10]
- 28) <http://www.buddhanet.idv.tw/board8/see.asp?oneid=189&passed=&upd=14&sql1=> [2004.11.13]
- 29) 「聖者法王如意宝晋美彭措勇列吉祥賢略伝」.
<http://buddha.nease.net/browse/zhuanji/fawang.htm> [2003.9.10]
「法王晋美彭措伝」.
<http://www.tjnw.com.cn/buddha/browse/zhuanji/fwgz.htm> [2006.9.10]
- 30) 「聖者法王如意宝晋美彭措勇列吉祥賢略伝」.
<http://buddha.nease.net/browse/zhuanji/fawang.htm> [2003.9.10]
- 31) 「聖者法王如意宝晋美彭措勇列吉祥賢略伝」.
<http://buddha.nease.net/browse/zhuanji/fawang.htm> [2003.9.10]
- 32) 「聖者法王如意宝晋美彭措勇列吉祥賢略伝」.
<http://buddha.nease.net/browse/zhuanji/fawang.htm> [2003.9.10]
- 33) 「聖者法王如意宝晋美彭措勇列吉祥賢略伝」.
<http://buddha.nease.net/browse/zhuanji/fawang.htm> [2003.9.10]
- 34) ケンポ・ソダジ著「法王晋美彭措伝」.
<http://www.tjnw.com.cn/buddha/browse/zhuanji/fwgz.htm> [2006.9.10]
- 35) 「陳曉東簡介」.
<http://www.ncn.org/zwgInfo/0005/47-80.htm> [2003.9.10]
- 36) 「中共緊急查禁上海陳曉東の長篇報告文学《寧瑪の紅輝》」『小参考Daily News』第440期(1999年5月31日).
<http://www.bignews.org/990531.txt> [2005.3.12]
- 37) 「陳曉東簡介」.
<http://www.ncn.org/zwgInfo/0005/47-80.htm> [2003.9.10]
- 38) 陳曉東「我的人權在哪里？」.
<http://bjzc.org/bjs/bc/86/32> [2005.03.12]
- 39) 陳曉東「我的人權在哪里？」.
<http://bjzc.org/bjs/bc/86/32> [2005.03.12]
- 40) 「陳曉東簡介」.
<http://www.ncn.org/zwgInfo/0005/47-80.htm> [2003.9.10]
- 41) 陳曉東「我的人權在哪里？」.
<http://bjzc.org/bjs/bc/86/32> [2005.03.12]
- 42) 陳曉東「可怕的“內控”——一個大陸作家刑滿釋放後的悲哀」.
<http://bjzc.org/bjs/bc/64/48> [2005.03.12]
- 43) 陳曉東「台湾出版商的軟骨症」.
http://big5.hrichina.org/subsite/big5/article.adp?article_id=5205&subcategory_id=152 [2004.10.12]
- 44) 陳曉東「我的人權在哪里？」.
<http://bjzc.org/bjs/bc/86/32> [2005.03.12]
- 45) 「陳曉東仏学作品選」.
<http://c-xd.net> [2004.10.12]
- 46) 陳曉東『寧瑪の紅輝』.
- 47) 「四川喇榮寺挑戰宗教禁令」(2004年3月15日).
<http://www.buddhismcity.net/newsall/general/details/5443/> [2004.10.12]
- 48) 雷風行「為青蔵鉄路鼓与呼——訪原自治区党委書記陰法唐」『中国西藏新聞網』.
<http://www.chinatibetnews.com/GB/channel99/119/122/200208/16/1778.html> [2004.9.27]
- 49) http://www.nanning.gov.cn/2226/2004_7_2/2226_26683_1088737643385.html [2004.9.24]
- 50) 馬強「強烈抗議中共四川当局封鎖五明仏学院併驅逐進修僧衆」(2001.12.26).
<http://www.epochtimes.com/gb/1/12/27/n159709.htm> [2004.9.24]

- 51)「中共継続圧制西藏色達喇榮五明仏学院」
(2004.8.9).
<http://www.tibet.org.tw/hotnews-2/hotnews-194.htm> [2004.9.24]
- 52) 1989年3月9日～1990年5月1日. 直接的には, 3月5日僧侶のデモに端を発し, 群衆がラサ市城関区の役所を襲撃したことにもない発令された.
- 53)「江沢民的内侄周永康在美起訴」.
<http://www2.renminbao.com/rmb/articles/2001/8/28/15434.html> [2003.9.16]
- 54)「堪布晋美朋措圓寂中共行動異常」(2004.1.8).
<http://www.xizang-zhiye.org/gb/xzxinwen/0401/index.html#040108.2> [2004.10.12]
- 55)「西藏知名仏教領袖堪布晋美朋措逝去」
(2004.1.7)『INTERNATIONAL CAMPAIGN FOR TIBET』.
<http://www.savetibet.org/Chinese/Chinese.cfm?ID=2246&c=71> [2004.9.27]
- 56)「西藏知名仏教領袖堪布晋美朋措逝去」
(2004.1.7)『INTERNATIONAL CAMPAIGN FOR TIBET』
<http://www.savetibet.org/Chinese/Chinese.cfm?ID=2246&c=71> [2004.9.27]
- 57)「西藏仏教大師堪布晋美彭措仁波切圓寂」
(2004.1.7)『達頼喇嘛西藏宗教基金会資訊網』
<http://www.tibet.org.tw/hotnews-2/hotnews-169.htm> [2004.10.12]
- 58) [Linka:1026]「【訃報】ケンポ・ジグメ・プンツォク師逝去」(発信者長田幸康) [2004.1.8]
- 59)「甘孜州色達県喇榮寺五明仏学院堪布牛麦彭措去世」.
<http://www.zyztzb.cn/zyztzbwz/religion/xxdl/80200402051007.htm> [2004.9.24]
- 60)「堪布晋美朋措圓寂中共行動異常」(2004.1.8).
<http://www.xizang-zhiye.org/gb/xzxinwen/0401/index.html#040108.2> [2004.10.12]
- 61)「法王如意宝晋美彭措圓寂經過教言」
(2004.1.23).
<http://www.57go.com/sichuan/Html/2004123123718-1.Html> [2004.10.12]
- 62)「普渡衆生」.
http://buddha.nease.net/neirong/index_r.htm [2004.10.12]
- 63)「法王如意宝晋美彭措圓寂經過教言」
(2004.1.23).
<http://www.57go.com/sichuan/Html/2004123123718-1.Html> [2004.10.12]
- 64)「寧瑪論壇」.
<http://nmzx.rswb.com/showthread.php?s=116c2e902def0996991923a918429633&threadid=12721> [2004.1.16]
- 65)「法王如意宝晋美彭措圓寂經過教言」
(2004.1.23).
<http://www.57go.com/sichuan/Html/2004123123718-1.Html> [2004.10.12]
- 66)「四川喇榮寺挑戰宗教禁令」(2004年3月15日).
<http://www.buddhismcity.net/newsall/general/details/5443/> [2004.10.12]
- 67)「丹增嘉措活仏略伝」.
http://buddha.nease.net/browse/zhuanji/hf_dzjc.htm [2003.9.10]
- 68) 2004年6月に五明仏学院を訪れた台湾人の報告による.
http://travel.mook.com.tw/explorer/explorer_16/diary_252.php [2004.10.12]
http://travel.mook.com.tw/explorer/explorer_16/diary_254.php [2004.10.12]
- 69) 1998年の写真がネット上で公開されている.
<http://www.photobase.cn/EditorIndex.asp?ID=3831> [2004.10.12]
<http://www.photobase.cn/picinfo.asp?coverid=16829> [2004.10.12]
- 70) 鴻朱「色達之旅」.
<http://www1.china.org.cn/chinese/TR-c/175327.htm> [2004.10.12]
- 【図版出典】
図 1)「陳曉東」ウェブサイト版『寧瑪的紅輝」.
<http://www.c-xd.net/nmdhh> [2005.3.23]
図 2)『見益略伝』五明仏学院, 2002年.
図 3) 4) 5) 川田撮影.
図 6) Work teams in the process of demolition of homes at Serthar, July 2001.
<http://www.tibetinfo.net/reports/trel/sr5.htm> [2003.8.20]
図 7) 8) 9) 川田撮影.
図10)「西藏仏教大師堪布晋美彭措仁波切圓寂」
『達頼喇嘛西藏宗教基金会資訊網』.
<http://www.tibet.org.tw/hotnews-2/hotnews-169.h> [2004.10.12]